

協働的な活動から学ぶ音楽の授業づくり ～「日本の音楽でつながろう」の実践を通して～

宮丸 奈草

はじめに

子供たちが活躍する未来の社会においては、様々な場面で起きる課題を解決するために、異なる多様な他者と協働して力を合わせながら解決方法を探り出していく力が必要とされている。また、様々な知識や情報を活用しながら自分の考えを表現したり、新しく創造したりする力をもった人材が求められている。

今期の学習指導要領改訂では、音楽科における各学年の目標において、「協働して音楽活動をする楽しさ」を感じたり、味わったりすることが示された。また、それによって得られる音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う、と続いている。

このことは、ただ単に一方的に知識や技能を教えるだけの授業を改善し、子供たちが中心となって、他者と対話しながら学びを深めていくことが期待されているととらえることができる。「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」を、子供たちの協働的な活動に焦点を当てて授業づくりを考えたい。

題材を扱うにあたって

「日本の音楽でつながろう」の題材は、日本の楽器を代表する箏や三味線、三線の楽曲を鑑賞して、それぞれの演奏の仕方を知り、音色の特徴を感じ取る学習から始める。その後、実際に子供たちが箏を弾き、音色や響きに気を付けて演奏する技能を習得する。この活動では、既習した知識をグループで教え合って練習することで、知識と技能が一体化し、

身に付けたい力をつけることができると考えた。次に日本の音階の一つである五音音階を用いて旋律をつくる活動を行う。ここでは子供たちの創作意欲を高めるために1人1台のiPadを用意し、iOS用のアプリ「Garage Band」を作曲補助ツールとして使用することにした。旋律をつくる楽器は、前時に箏を演奏したこともあり、日本の音楽らしいイメージをもたせるために、アプリ内の箏の音色を選択する。教科書では、仕上がった旋律に木琴などで伴奏しながら旋律を発表させることが学習の展開として紹介されているが、今回はアプリ内の豊富に用意された和楽器から子供たちが好きな音色を選び、旋律を重ねて音楽をつくることにした。

活動形態については、まず一人で旋律に合う音を重ね、次にペアで一つの音楽を創り上げる。どのような音楽にしたいのか自分の思いを伝え合いながら他者と協働して新しく創造する活動は、子供たちが活躍する未来の社会で必要とされる力につながると考え、ペアでの活動を重視して実践することにした。



○題材計画

- 1 日本の楽器に親しもう。～箏、三味線、三線の音色や演奏の仕方を知ろう。～
- 2 箏をひいて音色のよさや演奏の仕方を知ろう。
- 3 箏で「さくら さくら」を演奏しよう。

- 4 五音音階の音で旋律をつくろう。
～音楽の仕組みを使って～
- 5 ペアになって、まとまりのある旋律をつくろう。
- 6 ペアでつくった旋律に和楽器の音を重ねて音楽をつくろう。
- 7 ペアつくった音楽を聴き合い、作品の面白さを味わおう。

実践報告「日本の音楽でつながろう」

①箏の演奏 ～第3時より～

第2時で箏の演奏の仕方を映像で学んだ後、実際に箏を9面用意して、4人のグループで協力しながら「さくらさくら」の練習を始めた。子供たちは生田流の姿勢や基本的な奏法など、既習したことを互いに教え合いながら、意欲的に取り組んでいた。「最後まで弾けるようになりたい」という強い思いがあり、第3時にはほとんどの子供がゆっくりと丁寧に演奏することができるようになった。箏の鑑賞をしている時から「箏を弾いてみたい。」と言っていたが、実際に演奏できるとなると子供たちのテンションも上がり、とても楽しそうに集中して取り組んだ。活動の終盤にグループで一人ずつピアノの伴奏に合わせて演奏させた際には、友達の手を弾き方が様々で、自分とは違う音の出し方に興味を持ち、それが音色に影響することを学んだ。グループ内の練習の実際は、一人が楽譜を持って、もう一人が「七七八…」と歌い、もう一人が弾き方や姿勢を見てアドバイスする、など役割分担をしながら、効果的に練習することで、最終的には、目標にしていた「箏の演奏の



仕方を知り、音色や響きに気をつけて演奏する」ことができた。また、教え合う中で、箏の名称を覚えたり、親指による正しい弾き方を覚えたりと、ただ鑑賞するだけとは違って、習得した知識を活用し発揮することで、深い学びが具現したと考えている。

②つくった旋律に和楽器を重ねて音楽をつくる

～第5時より～

「Garage Band」内の和楽器は、長胴太鼓や平太鼓、締太鼓、太鼓の杵打ち、鉦など豊富な種類から選択して指でタップするだけで簡単に様々な音色でリズム音楽をつくることができる。また、タップする強さを調節すれば、音の強弱も表現できる。子供たちは、ペアでつくった8小節の旋律を聴きながら、まずは一人で様々な音を重ねた。始めは適当に即興的につくっていたが、そのうちに「旋律が伸びているところに、締太鼓をポンポンポンと入れてみよう」などの工夫が生まれてきた。一人でつくった音楽を数人、全体に紹介したあと、ペアで自分のつくった音楽を紹介し合い、ペアで一つの音楽をつくっていくように指示した。ここでは、一つのタブレットで数人が一緒にイヤホンを通して使えるスプリッターを利用した。

発表の際には、TV画面にタブレットの情報を映しながら、ペアの作品に対する思いや意図を話させた。聴く側に思考する時間を確保するため、8小節の音楽を続けて2回繰り返して発表させることにした。このアプリは、バーが音に合わせて進んでいくのが見えるため、聴く側の思考の助けになった。発表に対しての感想や意見は予想以上に多くの挙手があり、音声情報を



支える映像情報が話し合いを活性化したと考
えている。

前時の旋律づくりでは、積極的に音楽の仕組
みを使ってつくるように指示していたため、和
楽器のリズムをつくる時も音楽の仕組みを
使っているペアが多かった。

以下に、「Garage Band」の操作画面と照ら
して、思いや意図をもってつくった子供た
ちの音楽をいくつか紹介する。



このペアは、「最初の「まだだよ」とい
うところは、焦っているのをイメージして、
2つめの「まだだよ」は、「もう準備でき
たよ」と喜んでいるのをイメージした。」
と発表した。かくれんぼの「もういいか
い」「まだだよ」という「呼びかけとこ
たえ」の音楽の仕組みをうまく使った音
楽である。



このペアは、太鼓のリズムを正しく繰
り返すために、コピー&ペーストを用
いて拍に合ったリズムを重ねた。「音
の間が空かないようくり返しを使った。
最後に音楽のしめで、大太鼓をドーン
と鳴らした。」と発表した。まとまり
を意識して最後に迫力をもたせて終
わる音楽である。



このペアは、「最初に前説的なバチを
入れることで拍をそろえるようにした。
そして上の一定の音(リズム)を入れ
ることで拍が狂わないようにした。最
後は太鼓を連打してまとまるようにし
た。」と発表した。この発表には、聴
いていた子供たちから歓声が上がった。

旋律の前後にリズムを追加するという斬
新なアイデアだったためであろう。

この音楽づくりでは、8小節の構成と
して「始め」「中」「終わり」を事前
に教えていなかったが、自然に子供の中
から、旋律の前後に音を入れる発想が
生まれたのには驚いた。

この他にも、「音の大きさに注目して、
メインの箏が引き立つように音量を調
節した。」「高い音の太鼓と低い音の
太鼓で呼びかけとこたえをつくった。」
「鈺と太鼓との相性が悪かったので、
バチの音に変更した。」など、全体
の音量バランスや音色に注目してつく
ったものも多くあった。

また、一人でつくった音楽を全体に紹
介したAさんの音楽に対して、あるペ
アは、「Aさんの始めの太鼓が、「始め
るよー」という感じがしてよかった
から真似してつくった。」と発表し
た。このように友達からヒントを得
て自分たちの音楽を再構築するペア
もあった。「色々な楽器を合わせて、
お祭りで流れていそうな楽しそうな
音楽をつくった。」「朝、昼、夜のイ
メージでつくった。」というように、
情景を想像して、リズムを細かくし
たり、使用する楽器を少なくしたり
して静かな音楽をつくったものもあ
った。子供たちは、自分の感覚と比
べて首をかしげたり、うなずいたり
しながら、発表者の思いや意図を受
け入れながら鑑賞していた。

全体交流

～子供たちの対話から深い学びへ～

ペアでつくった音楽は、発表を通して、
自分たちの思いや意図を他者に理解
してもらうだけでなく、聴く側から
の意見や質問に答えたり、子供や教
師と対話したりする全体交流の中
で、さらに深い学びへと発展して
いった。

たとえば、「呼びかけとこたえ」とい
うキーワードは、今までの授業の中
で、たまにしか出てこなか

ったものであったが、子供たちの対話の中で、子供自身の口から頻繁に出てきたのである。「ここがこうで、呼びかけとこたえになっている。」といったように、TV画面の音楽の構造を指し示しながら、他者に説明することで、多くの子供たちに音楽の仕組みの言葉と音が結びつき、視覚的にも理解されたと思われる。音楽の仕組みは、今後出会う音楽の中で必ず出てくるため、しっかりと定着してほしい言葉であるし、音楽的な見方・考え方をする上でも必要不可欠である。

他にも「このリズムのくり返しがいい。発表者のミスかもしれないけど、偶然にタタンとなってしまったのも（結果的に）面白くていい。」と評価する子供もいた。つくった本人たちは気づかないことを、他者がその音楽を価値づけることも多い。全体交流は、異なる価値観を共有することで自分の考えを広げ、幅広い感性が養われる大切な活動といえる。

また、あるクラスでは、発表者に対し、「2トラックの太鼓は何を使っているの?」「どうして3小節から太鼓を連打しているの?」といった単なる質問が続いた時があった。そこで、「疑問に思うことはいいけれど、自分はこう思うけど、どうして?と聞いてはどうか」と、質問する根拠を示すように教師から伝えた。ただ聴いた音楽を分析して質問するだけでなく、自分なりの価値や評価を伝えた上で質問し、納得することが大切である。また、「○○のようなイメージにしたいのなら、こうしたらもっといいのではないかと思う。」といった代案を示すのもよいと伝えた。

そのように教師が明示的に指導してからは、「自分は今もっとシンプルな方がいいと思うけど、どうしてそんなにたくさん鉦を鳴らして騒がしくしたのか。」といった質問に変わっていった。教師は子供の学びの促進役として必要に応じて明示的に指導することも大切である。

発表後の意見交流が活発になり、その活動は3時間を要したが、子供の学びは、子供同士、また、教師との対話により深化したと感じている。

振り返りの時間に、ペアで協力して和楽器を重ねる活動についてどう感じたのか、子供たちの感想をいくつか紹介する。

「友達は“こうがいい”、自分も“こうがいい”と言い合いになり、意見が合わなかったけれど、そのリズムを一緒に合わせてやってみたらいい曲になった。どちらかに合わせなくても、ただ和楽器を重ねてみたら、よりきれいな音楽になったからよかった。」「自分一人で作った時は、太鼓だけでいいと思っていたけど、友達とやることで、速さや音量調節などを使って、自分だけでつくるよりは、上手にできた。他の楽器を重ねることで、人に感動が与えられるようにできて、友情も深まった。」「ペアでやると自分がつくった曲に何が足りていないかを言ってくれたり、他の友達が、ここをこうしたらいいんじゃないの?とアドバイスしてくれたから、より上手な音楽ができた。」

「自分では思いつかなかったことを言ってもらえて、考えが広まりました。こうじゃないのか?と言われて、確かにと思ったことから、自分の考えが浅いことに気づきました。」

おわりに

考えの違う他者と一つの音楽をつくることは、非常に難しい活動であることは十分に予想していたが、4年生の後半という発達段階において、たとえ意見が異なったとしても、工夫しながら課題を解決していく力が身に付いていることがわかった。また、今回の実践を通して、子供たちが他者と学び合うことで深い学びを生むことがわかった。今後も子供たちが協働して音楽活動をする楽しさを味わえるような質の高い授業づくりを目指していきたい。